

シリーズ第41話

間欠性跛行シリーズその②

閉塞性動脈硬化症

— 足は体に潜む動脈硬化の窓 —

かんけつせいはいこう
間欠性跛行とは…
 あまり連続では歩けなくなり、
 休み休みでしか歩けない状態のこと。



新城市民病院 血管外科
 院長 綿引洋一

心臓をポンプとすると、全身に血液を運搬する動脈は水道管に当たります。脳も心臓も手足も内臓も体の隅々まで、血液供給のために膨大な本数の水道管が敷かれています。

もともと、動脈は柔らかくゴムホースのようですが、動脈硬化になると柔軟性を失いさびた水道管のようになってしまい、一度さびた水道管になるとゴムホースの状態に戻ることはできません。

つまり動脈硬化とは、動脈の内側にコレステロール（悪玉コレステロール）などがたまることで通り道が狭くなり、動脈の弾力もなくなってしまう状態のことです。高血圧、糖尿病、高脂血症などの生活習慣病、喫

煙、肥満は動脈硬化を起す危険因子です。動脈硬化は全身の血管に起こり、さまざまな病気の原因となります。

特に腹部大動脈および下肢動脈に狭窄や閉塞を生じる病気のことを「閉塞性動脈硬化症」と呼んでいます。

血液の流れが悪くなるため、歩行時に足のしびれ、痛み、冷たさを感じます。さらに進行すると、安静時にも症状が現れます。重症の場合、歩行が困難になり、放置しておくとも足先が潰瘍（えぐれ）や壊死（組織が傷んで腐ること）を起こします。

診断には、四肢血圧測定を行い、足関節／上腕血圧比（足の血圧を腕の血圧で除したもの）を測定します。健康な状態では、

足の血圧は腕の血圧より高いので、1.0以上であれば正常ですが、

0.9以下の場合には閉塞性動脈硬化症を疑います。これに対する適切な治療を決めるにはCTやMRI、血管造影などで「どこが、どの程度狭くなっているのか？」を調べる必要があります。

動脈硬化の治療には生活習慣の改善が必要です。禁煙指導や食事内容の見直しを行い、さらに血管を広げるために運動療法、内服治療や血管内治療（バルーン血管形成、ステント留置術）を行い、ふさがった血管の代わりのルートをつくる血管再建術（バイパス術）などの手術も行

います。最終手段として、壊死に陥った組織を切断することもあります。

「足は体に潜む動脈硬化の窓」といわれ、多くの場合、足の病変が動脈硬化の終末期に現れることが知られています。つまり、足に動脈硬化がある場合、心臓や脳の動脈にも動脈硬化を起している確率は20パーセント（5人に1人）なので、狭心症や心筋梗塞、脳梗塞（脳卒中）を起す恐れも十分あります。

「足の冷えやしびれはありますか？」「歩いていて足が痛くなり、それ以上歩けないと思っただことはありませんか？」「じっとしていても足が痛くありませんか？」「足先の色が悪く、傷が治りにくくないですか？」

これらにお心当たりのある方は、閉塞性動脈硬化症かもしれません。足の調子がおかしいなど感じたら迷わず医師に相談することをお勧めします。